

合唱

内藤賦一

合唱とは、多くの人がこぞりて共に歌ふことなるべし。

我、社會人となりてのち合唱の機會減多に無く、老いたる今は猶更合唱どころか獨り歌ふこと稀になりけり。

思へば、若き日には合唱する機會多かりき

小・中學校行事締め括りし時の校歌、「野菊」歌ひし音樂會、運動會の應援歌、通ひし學校の思ひ出の端々に合唱の歌滿ちぬ。抑ゝ、音樂の授業たるや教師彈くオルガンに合せ皆にて唱歌合唱せるものなり。かやうなる數々の歌今でも多く記憶せり。

大學にては、應援部に所屬せるにより校歌・應援歌何度も歌ひたり。學生寮のコンパの席上、興に乗りて昔より傳はる舊制高校寮歌を高歌放吟せり。亦、入學早々誘はれデモに加はりしことあり、但しデモの主旨深く分からず矢鱈と歌ひたる革命歌のみ記憶に残れり。殊に“暴虐の雲光を覆ひ 敵の嵐は吹きすさぶ……”なる「ワルシャワ勞働歌」今でも口ずさむことあり。

加へて子供の頃、我が街なる映畫館にて放映せらるる子供向き映畫にて、其の盛り上がりし場面に主題歌掛かりし時、館内の子供達此れに合せ一齊に歌ひ出しぬ。満場に響き渡るは「赤胴鈴之助」か「月光仮面」か、昂奮と感動込め力一杯聲放つ大合唱は誠に愉快なる光景なり。

斯くの如く合唱とは、如何なる形にせよ我が心と感情を昂ぶらせ共に歌ふ朋友との絆深むるものならん。

就中、校歌は在校中數多く歌ふものなれば後年まで其の歌詞と曲は腦裡に強く残れるものと思ふ。

三月は別れの季節なり。而して何れの學校にても卒業式開催され校歌流るる時ならん。先日、我偶々テレビにて校歌にまつはる「別れの合唱」の物語に出逢ひたり。

其は、能登半島輪島市内なる小學校假設校舎にて行はれし卒業式の或る風景なり。

顧みすれば、輪島市一帯は貳年前貳〇貳四年一月一日發生の地震・津波にて壊滅的被害受け、更に同年九月集中豪雨に襲はれ、多くの小學校運営不能となれり。而して其の復興の一環として市内六校を纏めたる假設校舎建設せらる。被災せし兒童の内幾許か他地域に轉校し、其餘の六校の兒童集められ此の假設校舎にて學ぶこととなりて今に至りぬ。

而して、今年も六年生この三月卒業式迎へんとす。只卒業式定番の校歌齊唱は、六校集合體なれば無理難題と言ふべく到底無理ならむ。されど、當校音樂教師熟考して「今年こそ卒業生に何とか校歌歌はせし、艱難辛苦乗り越えて辿り付きし彼等の卒業の思ひ出にならまほし」とばかり、六校夫々の校歌の一番を繼ぎて編曲し何とか合體せしめ一つの曲に纏めり。

夫々個性あり長短もあらむ六つの校歌なれば其の編曲の苦勞思ひやるべし。出上がりし新校歌、六年生諸君卒業式に間に會はすべく毎日練習重ねたるらし。

斯くて、テレビは卒業式の“六校合同校歌”の場面放映せり。すべての卒業生教師のタクトに合せ合唱す。雙眼しかと見開き正面見つめ、精一杯に口開きてこれでもかとはかり聲張り上ぐる、その姿自信に満ちて堂々たり。我、兒童達の毅然として歌ふ姿及び表情見て感動の餘り不覺にも涙ぐみぬ。己の出身校の校歌のみならず他の五校の校歌をも歌ふ彼等の氣持如何と詮索せる我こそ恥づかしけれ。

更に彼等六年生のこと思ひやるに、入學せる貳〇貳〇年は彼のコロナ全世界に擴散し始めし年なり。以降三〇四年に亘り日本中あらゆるものを閉塞せしめたり。學校教育の現場においても然り、其の間兒童達は様々なる不自由強ひられぬ。思へらく、今般卒業せし輪島市の六年生兒童は、其の學校生活六年間のほどすべてをコロナ禍、地震・津波及び水害に依る數多の筆舌に盡くし難き困窮の中にて過せしには非ざる哉。今は斯かる卒業生諸君の今後の人生に幸あれと禱るばかりなり。

尚、彼の假設校舎はその名も輪島小學校となりて新たなる出帆を遂げたりとの由。

以上

(令和八年四月二十六日受附)